

ラパスでの皆既日食

道家 寧

ロサンゼルスから空路2時間足らず。ラ・パスはカリフォルニア半島の南極近く、コルテス海が大きく食い込んでいるラ・パス湾に面した港町であった。南バハ・カリフォルニア州の州都で、人口は16万人。半島部における交通・経済の中心地である。気温は乾燥しているが、温和。近年はフィッシングやダイビングなどの観光客が増え、ウエストコーストから週末を利用してやってくるアメリカ人ダイバーにとって、ラ・パスを拠点とするダイブエリアは、魚の大群はもとより、サメ、カジキ、シラなど、とにかく大物が狙える所として有名で、夏の終わりから秋にかけてはマンタやハンマーヘッドの群れが見られるという。そしてそのラ・パスに7月11日、世界中からこれも大物狙いのエクリプス・ハンターが多数集まった。大物とはもちろん、18年ぶりに起こる継続時間6分台の皆既日食である。

私たちのグループは旅行代理店の主催旅行の形式をとっているが、メンバー13名は仲間うちで集めた。この代理店にはほかに一般募集のツアーがあって、元東京天文台の秦 茂氏を中心に14名が参加している。また東京理科大天文研究部日食観測隊は、メキシコ隊55名を同じ代理店で行っており、これら3グループ、80余名（理科大の先発隊数名を除く）が7月7日と8日にわかれて成田を出発した。

私たちはラ・パスでは、ラ・コンチャ・ビーチ・リゾートに滞在した。ラ・コンチャはラ・パスの北のはずれにある高級リゾートホテルで、ダウンタウンからは車で20分ほど。町の中心から離れていて環境は抜群。夜はこわいくらい静かであった。スペイン風のホテルの客室はすべてオーシャンビューとなっていた。

日食観測は当初、このホテルのわきで行う予定であった。しかしここは砂地で、三脚がたてられないことがわかり、理科大先発隊の情報と日食の前々日に行った3グループ合同の下見から、理科大隊が滞在しているパルミラホテル裏の丘の上が観測場所に選ばれた。ここは宅地の造成地で、地面がかたく、広さも十分で、まわりが石垣で囲まれていて、一般の人が入ってこられないこと、ラ・パス湾を眼下に見る高台で見はらしがよいことなどが評価された。高台の斜面にはいかにもメキシコらしい、高さが3メートル以上はある巨大なサボテンがいくつも立っていて、それが向いの山の斜面までずっと続いているのが、双眼鏡を通してわかる。

観測場所を決定した後、ラ・パス市内に出かけてみた。市内は日食といっても、そんなに大騒ぎしている様子はない。しかしアメリカ人らしいグループに時々会うから、やはりふだんより賑わっているのだろう。店には日食グッズがあふれ、州政府の日食ポスターが大抵貼ってあった。太陽がしだいに欠けてゆく様子を表現した州政府の公式ロゴ入りグッズは、その由緒正しきゆえにホンモノにこだわる客（私かな？）に大変よろこばれていた。

日食当日は近所の方がテントをはってくれたり、パトカーが来てくれたり、いつもながら

地元の協力があった観測となった。空はまっ青に晴れ上がり、雲は全く見当たらない。雨期に入っているメキシコの中で例外的に晴れる確率の高いバハ・カリフォルニア。現地入りしてからずっと晴天続きであったが、当日はとくによかった。

灼熱の太陽は欠け始めても、しばらくは頭上から容赦なく照りつけていたが、その光がいつのまにか弱まっているのに気づいた。第2接触まであと15分というところで、太陽の近くにひつじ雲のような雲が突然わき出した。いままでの暑さがうそのように涼しくなって、10分位前になるとまわりが薄暗くなってきた。雲は皆既の6分前には完全に消えてしまった。2分位前（月の影が観測地からおよそ70キロメートルのところまで迫っている）、あたりは急激に暗くなった。同時に西の低空がだいたい色に染まり始め、周囲に広がっていった。そして「わーっ。来た、来た」という誰かの声が出て、まわりが騒然とする中、第2接触のおよそ50数秒前には、ラ・パス湾のはるか向うに長くのびる半島が、闇につつまれ、それからまもなくして観測地も巨大な月の影に入った。

皆既時間は6分台という感じはしなかったが、やはりこれまでで一番長く感じた。皆既中の印象としては、意外と明るかったこと。昨年7月のシベリア日食の際、雨の中でまっ暗になってしまったのとは対照的であった。

